

第1回静岡大学将来構想推進会議議事録

【開会】

(司会)

定刻となりましたので、これより、第1回静岡大学将来構想推進会議を開会いたします。
委員の皆様におかれましては、本日は御多忙のところ、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

ここで、本日の配布資料について確認いたします。

(配布資料の確認)

(司会)

過不足や乱丁落丁等がございましたら、事務局までお申し付けください。

本日は、初回の会合でございます。

本来なら、ここで、委員の皆様から、自己紹介を兼ねまして一言ずつご挨拶をいただくべきところですが、後ほど、意見交換の場にてご発言いただく予定でありますので、その際によりしくお願いいたします。

なお、皆様のご紹介は、お手元にお配りしております資料1の裏面の委員名簿をもって、代えさせていただきます。

それでは、最初に、この会議の趣旨について、事務局よりご説明いたします。

【趣旨説明】

(静岡市役所 松浦企画局長)

静岡市役所企画局長の松浦でございます。

本会議の設立への経緯と目的について3分ほどお時間いただきまして、ご説明申し上げます。

従前、開催されておりました、静岡大学将来構想協議会、その第6回会合が令和3年3月に開催されております。その協議結果として、本日の資料2として配布しております「静岡大学将来構想協議会まとめ」として結実をしております。お手数ですが、お手元の資料2、まとめの6ページ、7ページ目をご覧ください。

まとめの6ページ、7ページです。6ページ左上、タイトルとしまして、「課題解決に向けた大学の取組と地域との協働（提言）」とあり、本分の冒頭では、国立大学に期待される機能を踏まえて、具体の地域課題に対して、地域の中核的な役割として、地元自治体や産業

界と一緒に挑戦することを望む、など、大学を含む地域に対しての提言となっております。

その内容は、枠内の7つ、項目のみ若干確認いたしますが、①が学部を中心とした取組、②が大学院を中心とした取組、7ページの⑤が産学連携・地域連携を中心とした取組、最後の⑦が地域と大学の協働体制構築への取組、といった内容について、挑戦することを望むといった内容となっております。資料2のご確認ありがとうございました。

経緯のお話に戻ります。この3月のとりまとめにつきましては、令和3年7月に文部科学省へ静岡市の副市長が報告に上がっております。その際、先ほどのまとめが今後どうなるのかについては、フォローアップが必要ではないのか、というお話になりました。

静岡市では、このフォローアップを行うことが、まとめの実効性を担保することにつながると考え、静岡大学さんにお声掛けを行い、本日、静岡大学将来構想推進会議として新たな会議を組織するに至ったところでございます。資料1、設置要項の記載の通り、委員の皆様におかれましては、将来構想の推進に向けた活発なご議論をお願いしたいと存じます。

以上でございます。

(司会)

早速ですが、これより本日の会議に入ります。

ここからの進行は、座長であります小長谷様にお願いします。

(小長谷座長)

皆さん、こんにちは。

ただ今、ご紹介いただきました、小長谷と申します。この度は会議の座長を務めさせていただきますので、よろしく願いいたします。また、コロナという非常に厳しい状況でありますけれども、全員の皆さんに出席いただきまして、本当にありがとうございます。

この会議は今、静岡市企画局長からご説明がありましたように、昨年3月にこの会議の前身であります「静岡大学将来構想協議会」という組織がございましたけれども、そこで提言をさせていただいた内容につきまして、静岡大学さんの方で、その後の提言を踏まえた取組等状況につきまして、ご検討いただいております。そのことにつきまして、フォローアップをしていこう、という趣旨のものでございます。

改めて申し上げるまでもございませんけれども、この静岡大学のこれからのありようということに関しましては、静岡大学さんもとより、私も静岡市、またこの地域にとりまして、非常に大きな課題・問題でありますし、一緒になって取り組んで、それぞれの、静岡大学が、また地域がより発展していかなければならないというふうに考えているところであります。そのための仕組みづくりということも非常に重要なと考えているところであります。

この会議では、委員の皆さんと意見交換を通じて、静岡大学と地域との連携について、一緒になって大学を一つの核として、オール静岡・オール静岡大学で進めていきたいと考えておりますので、是非よろしくお願いをしたいと思います。

今日は積極的なご意見を賜るとともに、会議の円滑な進行につきまして、ご協力をお願いいたしまして、冒頭の私からのご挨拶とさせていただきます。

よろしくお願いをいたします。

【議事（１）静岡大学の将来構想について】

（小長谷座長）

それでは議事の「（１）静岡大学の将来構想について」に移ります。

静岡大学におかれましては、令和３年３月の静岡大学将来構想協議会のまとめ以降、学内にて様々な取組策についてご検討を進めていただいたと伺っているところであります。

本日は、最初に静岡大学より、大学が考えている取組案、将来構想につきまして、ご説明をいただきまして、その上で、皆さんと意見交換を行いたいと思います。本日は、本会議の委員でもいらっしゃいます、静岡大学の森田理事兼副学長からご説明いただけるとのことでございます。

森田様、よろしくお願いいたします。

（森田委員）

ご紹介いただきましてありがとうございます。静岡大学の理事・副学長の森田でございます。本日はこのような機会をいただきまして、大変ありがたく思っております。ただ今、座長から説明がありましたように、「静岡大学の将来構想について」という題をいただきまして、これから２０分ほど時間をいただいて、お話をさせていただきたいと思っております。

その前に、私の方の自己紹介をさせていただきます。私は、昨年度までは農学部学部長の方を務めさせていただき、今年度からこの職に就きましてほぼ１年経ちましたけれども、何分、その、大学の執行部としての役割というものに対して、まだまだ慣れないところもあって、私も毎日新しいことに出会いながら、勉強させてもらっているところでございます。そのような中で、議題の将来構想ということについて、私の方から説明不足のところもあるかと思っておりますけれども、その辺、ご質問等意見交換の中で、皆さんからご意見をいただきながら、またそこで、質疑を進めさせていただく中で、いろんなことに答えていきたいというふうに思っております。よろしくお願いいたします。

最初に、将来構想のご説明に入る前に、少し、まず静岡大学について、皆さん、ご存じかと思っておりますけれども、改めてご紹介をさせていただきたいと思っております。

お手元に「静岡大学の概要 2021」がございますけれども、お開きいただくと、最初の

1 ページ、1 枚目の所に本学の自由啓発・未来創成という理念がございます。

さらにめくってもらって、4 ページのところに本学の組織図が出ております。私たちは、人文社会科学部、教育学部、情報学部、理学部、工学部、農学部の6 学部とあと、地域創造学環の一学環というこの体制で、学生の教育にあたってきているということでございます。大学院についても、その下にございますけれども、さらに研究所につきましては、電気工学研究所、グリーン科学研究所等の研究所を用意しながら、教育とともに研究にも勤しんでいるというところでございます。

大学の規模ということになりますけれども、それにつきましては、ざっとめくっていただいて、1 4 ページのところに、大学の職員数の一覧がございます。本学では、先ほど組織としては学部と申しましたけれども、これは教育組織の上の学部という形になっております。職員につきましては、教員組織として領域という名前を使わせていただいております。従いまして、学部ではなく領域という形で記載しております。表の下の所に全体が出ておりますけれども、事務員、教員、さらには附属学校園の教諭の方も入れて、全員で1, 3 0 0 名余の職員を抱えているということになります。

続いて次のページの所に今度は学生の入学定員についての一覧がございます。1 6 ページ右の方の下の所に全体が出ておりますけれども、入学定員は1, 9 7 0 名、全学部で約2, 0 0 0 名を擁するというのが本学の規模でございます。この入学定員の中で、1 5 ページのところに、人文社会科学部がございますけれども、こここのところの計の下の欄に、括弧書きで6 0 名というのがございます。これは何かと言いますと、1 6 ページの下のところ欄外に、説明が書いてございますけれども、夜間主コースというのを持っております。ご存じのように昔の法経短大が前身ですけれども、昼間の授業だけではなくて、夜間の授業を中心としたコースを持っているということになります。これが本学の特徴になってございます。めくっていただいて今度は大学院生につきましても、修士課程では5 7 5 名、博士課程では5 4 名の定員という形になってございます。あと、教育学部の方には専門職学位課程として教育学研究科4 5 名の定員、さらに連合大学院という形で岐阜大学と本学の農学研究科との間に博士課程を持っているというのも、本学の組織の中の一つでございます。

今度は少しとんでいただいて、2 1 ページ、2 2 ページのところに入学状況ということで、どの地方から本学に学生たちが来ているかということについてまとめたものをお示ししております。2 2 ページの方で見ていただくとおわりの通り、日本全国から本学に学生が来ているということになります。ただ中心は、いずれもここでいうグラフでいうと、緑色のところに示すように、県内の出身者、さらには東海地方というものが過半を占めているということが特徴です。ただ、国立大学として、北は北海道、南は九州、沖縄まで毎年、様々な学生を受け入れているということです。あと、特徴としましては、文系の学部つまり人文社会科学部とか教育学部、さらには右の下の地域創造学環において、県内出身者または東海地域の出身者がかなり多いということになっています。また理系はそういう割合が若干低いと

いうのも特徴かなというふうに思っております。

今度は、出口論ですけれども、次のページ23ページのところに学部、右の24ページのところに大学院の就職状況、就職先について書いてございます。真ん中あたりの所に、就職先の所在地ということで、東海、静岡県、静岡県以外という所がございましてけれども、この辺のところはやはり中心になっておりますけれども、合わせてその上の関東地域がそれに続くようになってございます。従いまして、本学の卒業生の配置先としてはそういうようなところが中心ということになっております。思った以上に、たぶん、地元への就職が多いということも、本学の特徴かと思っております。

さらに国際交流、今回の提言の中にも留学生等、国際化についてご提言いただいておりますけれども、本学の国際交流の関係につきましては、次のページ25から26ページの所にお示ししております。留学生、外国人留学生の受け入れの現在の状況で、国別等、各学部の配置場所についてもそこに書いてあるとおりで、現在合計で372名の学生を受け入れています。右の下の所にグラフがございまして、外国人の留学生の受け入れの推移ということで、年々、この10年、15年ぐらいは毎年留学生の数、受け入れ数は増えてきてございます。しかしながら、令和3年、2021年、昨年度ぐらいはちょっと減ってきてはございますけれども、これは、コロナの感染の広がりによる影響というふうに見ております。また、世の中が平和になれば、留学生を広く受け入れて、国際化の方に私たちも取り組んでいきたいというふうに思っております。

そのあとですけれども、今度は大学がどんな外国の大学と交流しているかということについて、国際交流のページでは29ページ以降に書いてございます。大学間協定を結んでいる大学名の一覧でございまして、約40以上の大学とこのような協定を結ばせてもらっていますし、さらにその次のページ、31ページ以降は大学間ではなくて部局間、いわゆる学部間とか研究所同士で結ばれているものも同じくらいございます。世界の国々と本学とは提携を結びながら、様々な学生や教員同士の交流にまい進しているところでございます。あと、最後けれども、37ページのところですけれども、本学教育学部は、昔でいうと師範学校の時代から、教育については力を入れてきているところですが、附属学校園として、静岡と浜松に小学校と中学校を、加えて島田にも中学校を、あと特別支援学校、さらには幼稚園も附置している、いわゆる総合大学であるということになります。

簡単ですけれども、静岡大学の概要についてご説明させていただきました。あと、静岡大学の歴史については、先ほどの概要の中にも触れられてはございますけれども、資料2（資料4）の方を開いていただきたいと思います。資料2（資料4）の方の最初のページ、1枚めくっていただいておりますね、ここにですね、静岡・浜松が迎える100周年というところがございまして、本学は大正11年、1922年に浜松では浜松高等工業学校、また、静岡では旧制の静岡高校が創設されてございます。これが元になりまして、昭和29年に新制の静岡大学が・・・。

(事務局)

森田先生、資料は資料4になります。

(森田委員)

すいません。申し訳ありません。資料の4です。

開いていただいて1枚目ですけれども、そのようになっております。現在はそのように新制大学となり、その後、教育学部の設置、さらには昭和26年に農学部の設置、平成7年に情報学部の設置、という形、さらには、先ほど言いました地域創造学環が右の下の方にございますけれども、これが設置されて現在の形になっているということです。先ほど申し上げましたように、この本学の礎となる、元となった浜松高等工業高校と旧制静岡高等学校、これらが1922年に設立されてから、来年度に100周年を迎えるという記念すべき年ということになりました。これについては、静岡新聞さん等で、浜松についての100周年という形で特集記事が組まれて、皆さんもお目にされたことがあるかと思えます。この100周年については、私たちとしても、非常に歴史について重みを感じてございますし、そこに書いてあるように、100周年の卓越した実績を礎に、次の100周年を目指すと、今回のこの推進会議で、皆さんからいただくこともこれからの100周年に向けての第一歩だというふうに位置付けています。今回、機会をいただきましたので、皆さんのご意見をよろしくお願いいたします。

さて、前置きがかなり長くなってすみません。それでは、静岡大学将来構想について、お話をお伺いさせていただきたいと思えます。資料の方は、資料の3の方をお開きください。A3の紙で1枚の用紙にまとめてございます。大きく上の段の未来戦略という部分と、下の段は将来構想協議会のまとめという段ということになってございます。先ほども座長からの趣旨説明等のところにもございましたけれども、下の段のところには将来構想協議会からの提言を求められましたけれども、その①番から⑦番までの項目と、その説明文についてそこに記載させていただきました。

本学はこの3月にとりまとめをいただいて、その後、これをどう活かしていくかについて、いろいろ協議・検討してまいりました。そのところ、まず私たちとしては、この本学の未来戦略を描くうえで、この提言を受け止めるところが第一だというふうに位置付けております。その中で①に対するいわゆる学部を中心とした取組の中に対しては、新たな教育の未来を開拓するという位置付けの中で、いわゆる新学部の設置ということについて、1年、学内で協議してまいりました。また②、③、④に対しては、これは静岡大学全体、いわゆる教育活動がもっと活発化するため、または幅広い、より深く活動するための提言というか位置付けとさせていただきました。そのために下に書いてございますけれども、静岡大学が社会にもたらず力、いわゆる「静大力」を醸成することで、この提言のほうに活かしていきたいと

いうふうに思っております。また、⑤、⑥、⑦については、社会との連携強化ということで、醸成された静大力をさらに発揮して、社会のイノベーションを先導するという位置付けとなっております。左の端から右の端に矢印が出ておりますけれども、本来であれば、学内的なこととしては、刷新的な新学部を設置するという、そして、さらに大学の全体の教育活動を拡張するという、これが一つ大学の取組であろうと思っております。またそれを、社会等の連携を通じて繁栄させるという意味で右矢印が出ておりますけれども、本来ここはお互いに矢印が右と左で交差するのだろうという位置付けで考えてございます。つまり、社会に私たちの大学の成果を反映させる、提供するとともに、逆に言うと社会から私たちもいろんな刺激を受けてお互いに発展していくという形になるかと思っております。大きな流れとしてこのようなことを考えてやってきたということになります。

私たちが学内の改革として一番重要視している新学部の設置について、この後少し説明させていただきたいと思っておりますけれども、その他の部分については直接、一つひとつ説明することは、今回は時間の関係もあって割愛させていただいて、また意見交換の部分で皆さんからご指摘を受ける中で私たちが考えていることをご披露できたならと思っております。

また、大学の事情ですけれども、大学が法人化された以降、6年ごとに中期目標・中期計画という大学内の実施計画を作っております。それを文科省等国が成果を6年ごとに評価しながら、そして次の6年に向かって、また新しい計画を立てていくということで今、運営をされています。その中で今年の位置付けとしては、どのようになるかという、第3期の期間が本年度で終了となるということで、現在第4期の新しい中期目標・中期計画を作っているところでございます。だいたいできまして、現在文科省の方に提出して、文科省の正式な承認を待っているところでございます。そういう意味では少しまだ仮の部分もありますので、この提言を踏まえた計画でしたけれども、今回は全てをお示ししてございませんので、内容については私の方から、ご質問受けた中で説明できるものについては説明したいと思っております。よろしくお願いいたします。

資料の4の方に戻って移りますけれども、2枚めくっていただいて、先ほどの100周年の次のところでございます。今回の提言を受けて、4月から大学側としては、この提言を静岡大学の将来構想に活かしたいというふうに考えております。それを具体的なものに落とししていく、またはそれを進めていくためには、やはり核となる部分、核となる組織が必要でございます。そのために大学改革の司令塔となるという位置付けの新たな組織として、静岡大学未来創成本部というものを設置いたします。概要についてはそこに書いてある通りでございますけれども、文科省の方にもこの提案をさせていただき、来年度の4月1日から設置予定ということになってございます。ただし、先ほど言いましたように、次期中期計画にこれらのいろんな意見を活かしていく、または、それに組み込んでいくためには、また、さらには新学部の取組も進めなくてはならないということで、事前に10月に準備室というものを作りまして、それを核にこれまで今年度は静岡大学の将来構想を検討してきたと

というのが経過でございます。具体的には第4期の中期目標・中期計画に基づく取組を推進する、またはこれを10月の時点でいくと、この中期計画を十分なものに練り上げていくということになります。それによりまして、地域社会との共創というものを実現したい。2点目としては、学内資源の活性化を目的に、教育研究組織の改編、ここが新学部の創設というところに当たりますけれども、それ以外にもいろいろとしていかなければならないということを考えてございます。その戦略の策定と学外、内外での調整ということで、未来に向けた集中と選択、資源であったり、知識であったり、いろんなものが学内に持っているものについてこういう形で進めていきたいというふうに考えてございます。未来創成本部につきましては、構成については右の構成図の方に概略が書いてございますけれども、学長を本部長としまして、常任の理事3人が、それぞれ本部のメンバーとなっております。そこから具体的に先ほど言った2つの目的を達成するために、それぞれ学内教員から適宜構成する検討チームを今後立ち上げまして、さらにはアドバイザーボードとして、自治体の方、産業界の方、さらには、他の国公・私立大学の方、大学のOB・同窓会等の助言をいただく場を設け、本学の改革を進めていきたいというふうに考えております。

今回、文科省の方にこの案を提案したところ、現在、内示の段階ですけれども、教員に2名分の手当をいただいたということで、連絡を受けてございます。従いまして、今後はそういう人材を活用しながら、新たな人材をそこに入れながら、この取組がよりスピーディーに進むような形で取り組んでまいりたいというふうに思っております。

そのような組織の中で検討させていただいて、新学部の方の構想を練ってきたところでございます。次の1枚のところにも新学部の目指す未来像、基本的なコンセプトについてまとめたものを提示させていただきました。これにつきましては、もうすでに静岡新聞の方から昨日、中日新聞は本日、いろいろと記事が出ていて、その中で関係者の方から話として取材されていますけれども、残念ながら、私が中心でずっとやってきたつもりだったんですけれども、関係者として取材されていなくて、私は誰だったんだろうと、残念な思いもあります。

(一同笑う)

(森田委員)

そんなこと、冗談を言いまして申し訳ありません。静岡新聞の方に書かれている内容、お読みの方もいらっしゃる、もうすでに内容自体ご存じかと思いますが、静岡新聞さんはよく理解されているなと思ったものです。いろいろと書かれているのですが、真ん中の一部、静岡大学はということで鍵括弧になっているんですけど、「新しいことを自らの手で実現することができる人材を養成する」と、この大学の新学部についての目的を書いてございます。本当にこの通りでございます。私たちはいろんな課題を世代ごとに抱えておりますし、さらに時代を経るにしたがって複雑化されてきているように感じております。その時にやはり、

勉学もそうですけれども、学生が主体的に取り組みながら、自分で得た知識なり技術なり、自らの考えの中でそして課題解決を実現する方に持っていけると、そういう人材を育てたいというふうに考えてございます。

具体的に資料の方に書いてありますけれども、その具体的な例として、新しい価値観や社会の仕組みを創造する人材を育成するということになってございます。そしてこれにつきましては、「総合知」という言葉が赤字で書いてございますけれども、これを、キーワードとしてとらえたいと思っております。総合知というのはご存じかもしれませんが、産業のイノベーション、基本計画等、国の計画の中でも明記されておりました、これについて米印ということで、この資料の一番下のところに米印で総合知の定義について書いてございますけれども、真ん中の後半ですけれども、一つの専門を深く学ぶとともに、他の分野にも関心を広げる、広い知識と、それによって得られた広い知識と論理的な思考、規範的な判断力を身に着けるということとでございます。今まで農学または理学とかそういう学問分野が確立されておりました、それぞれ単体の専門という形で私も勉強してきたわけですけれども、そうではなくて、それにもう一つ、例えば物理を専門けれどもとしていても、文学も勉強しており、話すことができます、文学も知識がございます、というような、単一ではなくて複合的、つまり、文理融合的な考えを育成することを基礎としているということです。それによりまして、必要な姿勢や能力となる、右のところに四角で書き込みありますけれども、思考力、実践力、さらにはコミュニケーション能力を養成して、そういう人材を社会に輩出していきたいというのが新学部を目指すコンセプトでございます。特にそのコミュニケーションである実践、思考の中には、具体的には語学力を身につけさせたいと思ひますし、デザイン力も目指したい、そしてさらには、そこに技術をミックスすることで様々な課題を解決する力をつけることができるのではないかとこのように考えてございます。

具体的に名称につきましては、グローバル共創科学部というのを仮称としております。まだこれは本決まりではございませんけれども、このような名前を今、考えているところでございます。あと、学部につきましては1学部・1学科でございます。その中には国際地域共創、環境科学、人間科学、この3つのコースを設定したいというふうに考えてございます。本学の新学部につきましては、基本的に先ほど言った総合知というところが中心となっておりますけれども、学生に具体的なスキルも身に着けさせたいと思っております。その具体的なスキルとは何かと言いますと、一つは英語力・語学力でございます。あともう一つは、今、Society 5.0とか、いろいろなデータ社会になってきましたので、これについてはデータサイエンスの技能を身に着けさせたいと、この二つを武器に、文系であろうが、理系であろうが、その能力を涵養したいというふうに思っております。あとこの3コースにつきましては、イメージとしては、現代または将来、社会が抱える課題を見た時に、一つ目は人に関わるものであること、二つ目は社会に関わるものであること、三つ目が地球に関わるものであること、というふうに考えてございます。先ほど言ったコース名でいくと、人と

いうものにつきましては人間科学、社会というものについては国際地域共創、地球というものに対しては環境科学的なもので、こういうようないわゆる課題群として各コースを考えて、3つのコースを設定させていただきました。ただ、これにつきましても、先週、初めてですけれども、文科省の方の担当の方と相談を始めたばかりでございまして、今後も相談を続けながら、また、もう一つは学内での新学部の構想の議論というものを深めてまいりながら、この構想をまとめていきたいというふうに考えてございます。

ちょっと時間超過しましたがけれども、そんなことで、今、考えている内容、特に新学部構想についてのおおまかな、コンセプトを中心に話させていただきました。雑駁な説明でわかりにくいところもあったかと思っておりますけれども、私の方からの説明、紹介は以上とさせていただきます。

よろしく願いいたします。

(小長谷座長)

ありがとうございました。ただ今の説明に対するご質問やご意見につきましては、後ほど意見交換にて行いたいと思っております。

【議事（2）意見交換】

(小長谷座長)

それでは、これより意見交換に移ります。本日は第1回ですので、先ほどの静岡大学からの説明も踏まえて、委員の皆様のお考えやご意見などをご披露いただければというふうに考えております。

最初に、全委員から5分程度ご発言をいただきます。事務局に対する質問につきましては、発言後にその場でお答えいただければと思います。一巡した後は、お時間の許す限り、適宜ご発言をいただければというふうに考えております。先ほどの、今、森田さんからご説明いただいた資料4、またその他のことについても、全般的にご意見等いただければと考えておりますので、よろしく願いをいたします。

それでは、一通り順番にお願いをしたいというふうに考えております。最初に静岡市の大長副市長の方から順番にお願いしたいと思います。

(大長委員)

静岡市副市長の大長です。お世話になります。

私は昨年の4月に、座長をやってらっしゃいます前副市長の小長谷前副市長から引き継ぎまして、ようやく1年経つところでございます。この静岡大学の将来構想につきましては、小長谷前副市長から引き継いでおりますので、おおよそのことはわかっておりますけれど

も、みなさんとの意見を交換する中で、市としての立場からいろんな発言をさせていただきたいと思いますので、ひとつよろしく願いをいたします。

ちょっと遅れましたけれども、皆様にはお忙しい中、推進会議の委員を快くお引き受けをいただきまして、また本日はお忙しい中、このように全員の皆様に参加をいただきまして、本当にありがとうございます。会議の設置者であります静岡市を代表いたしましてお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

また、静岡大学様におかれましては、昨年度末の協議会のまとめ、提言を受けた後、精力的にご検討いただきまして、今回このような構想案を出していただきましたこと、誠にありがとうございます。感謝申し上げます。静岡大学の取組につきましては、今後、地域が一体となって支え、応援していきたいと考えております。本日はそのための具体的なアイデアを委員の皆さんと議論できればと思っておりますので、よろしく願いをいたします。

ただ今、森田理事・副学長様から、取組策のご発表をいただいたところですが、特に新学部の構想につきましては、協議会の提言の1番に記載されているところでありまして、これは期待の大きいところでございます。素晴らしい提案をいただいたと思っておりますので、まずはその点についても感謝申し上げます。ありがとうございました。

私からは2点ほどご質問をさせていただきたいと思います。一つは新学部構想、説明がありましたけれども、既存の学部の位置付けというのはこれによって何か変わるのかどうか。それを一つお伺いしたいと思います。それから将来構想協議会のまとめの対応についての資料3ですか、ここを見ますと、リカレント教育、大学院構想、地域との連携体制・構築についても、真ん中、それから右端に書かれておりますけれども、これにつきましては現時点でのスケジュール感というものを、どこまで説明いただけるかちょっとわかりませんけれども、ご説明できる範囲でスケジュール的なものをご教示いただけましたらありがたいと思いますので、この2点についてよろしく願いをいたします。

(森田委員)

ありがとうございます。

最初の方の新学部と、既存の学部との関係ですが、これまでさきほど6学部1学環という形で、地域創造学環ができたということがありましたけれども、地域創造学環につきましては、地域の課題を取り上げて、それを解決するということを通して、人材を育成するという目的でつくられたものです。これにつきましては、本学の新学部構想とも非常に密接に関わるところでございますので、地域創造学環につきましては、新学部構想の方に発展的に取り入れるという形です。その他につきましては、お話ししましたように、様々な分野の知識または教育が必要であるという位置付けでもございますので、6学部全てから、教員とか定員を含めてですけれども、協力をいただきながら、先ほど言った目的を果たすための組織を作っていくたいというふうにご覧いただけます。

あとこのスケジュール感につきましては、ある意味この取組というのが未来に亘って、たぶん、私たちに求められているものであろうと思っておりますし、逆に言うと今、求められているものでもあるという位置付けで考えてございます。従いまして、できることからすぐにやっていきたいというふうに考えてございますけれども、先ほど言ったように、今度の中期目標、次年度からの中期目標にそれぞれ、年間のスケジュール感をもって計画を作りつつありますので、それで応えていきたいというふうに思っております。

例えばですけれども、リカレント教育につきましては、先ほど言った人文社会科学部の方に夜間主というコースがございます。基本的にここで学んでいる方々は、社会人が多いわけですけれども、これで社会人の教育についてのこれまでの豊富な経験とかコンテンツが用意されていますので、それを活用しながら、さらに社会人のリカレント教育の方に進めていきたいというふうに考えてございます。一例ですけれども、今、今回のコロナ渦の中でオンライン教育が、全国的に教育の中で進んだということになっております。本学でも急きよでしたけれども、かなりのコンテンツが蓄積されてきております。そうなってくると、今回、社会人教育となると、一つの場を集めて、ある一定時間拘束するということが、社会人の方にとって、非常に大変なところになってくるわけですけれども、これからは実際に集まる場所の対面型と、オンラインの教育、これをうまく組み合わせることによって、社会人の方のリカレント教育というところにも、私たち静岡大学が協力できるのではないかとというふうに考えてございます。

そんなことも今、計画の中に入れていきますし、母体となる人文社会科学部の方でも進めていただいているというふうに聞いてございますので、そういうことも踏まえながらやっていきたいというふうに思っております。

よろしいでしょうか。

(大長副市長)

ありがとうございます。

リカレント教育につきましては、やはり、静岡市の方でも関心がありまして、市長もかなり関心が高いです。人生100年時代ということで、リタイアした皆さんは、特に学びへの機運が高いと思います。そういう皆さんの学びの場をぜひ作っていただきたい。静岡市も協力できるのであれば、協力していくと思っておりますけれども、そういうことで、そういう皆さんが学ぶことによって、知識・技術をつけて、また地域課題解決につながっていくと思っておりますので、よろしく願いをいたします。

(森田委員)

是非ともお願いしたいと思っております。

大学に来てもらって、私たち静岡大学、田舎にございますので、そこに来ているだけでも

かなり大変なところがあると思います。そういう意味では、静岡市さんの方でもそういう場を、どこか近くのところ用に用意していただいたりとか、また、そこに私たちが出掛けたりとか、いろんなところで市と協力しながらそういうリカレント教育にしていきたいと思っております。

また、この社会人リカレント教育については、例えばですけれども、静岡県内は中小企業がかかなり多いというのが実際けれども、そういう時にすぐに技術的なものを求められる経営者さんが多いと思うんですけれども、今の時代、今度、経営学とかまたは、次の社長を育てるためのリカレントというのも大事なというのが、私たち大学側で考えていることで、そういう部分についても私たちの経済とか経営、または法律も必須だと思っておりますけれども、そういうものも提供できるというふうに考えてございますので、社会人のリカレント教育というのは、本学の今後の一つの柱というふうに位置付けておりますので、よろしくをお願いいたします。

(小長谷座長)

ありがとうございます。

では、次に柴田委員をお願いします。

(柴田委員)

ご指名いただきました柴田といいます。私はJA経済連のOBということになっておりますけれども、元々は静岡大学の農学部の卒業生でありまして、OBという位置付けで私は意見というか考え方を述べさせていただきたいと思っております。

今、お話を聞いて、本当に我々の学生時代とは随分、社会環境が変わっている中で、これからの新しいスタイルといいますか、随分進んでいるな、ということを感じました。

特に、Society 5.0という社会変革がこれから進むと思われまますけれども、我々にはちょっと想像がつかないようなバーチャルの世界であって、いろいろあるんですけどね、そういうものへの対応ということになるとやはり、幅広い知識というか、学問というか、どうしてもその求められるんじゃないかなと。

私は農業団体に長年勤務したわけですがけれども、やはり経験だけで幹部職になる、あるいは経営者になるというのは、非常に問題点もありますし、職員をリードしていくという形からいうと、ちょっと不足だなというふうに感じます。従って、農業を専門にやってこられた方でも、いろんな知識を持っていただいて、幅広い知識の中でいろんな考え方を出す、あるいは職員をリードしていく、そして経営をやっていけるような、そういう人材を是非、社会に出してほしいな、というふうに思っております。

私もたまたま理事長職というのをやらせていただきましたけれども、私は農学部の中で技術的なこともやってきた関係で、大変苦勞いたしました。やはり職員を引っ張っていくと

というのは、相当その幅広い知識・考え方を持たないと、なかなかついてきてくれないというのが、これからもそうだろうと思っております。従って、新しい学部というのに大いに期待をしているわけですが、特にこれから、いろんなものが開発され、研究され、ものがつくられていくだろうと思います。そういう時にこういう本当に専門的にやった方のご意見と、幅広い知識を持った方の意見と、そういうものを合わせて、そして、その世の中に新しいものを出していく、こういう考え方が素晴らしいなと私自身は思っています。

特にこれから世界的には人口がこれだけ増えてきますし、私は食料関係がちょっと心配になる部分もあるんですけども、そういう意味でやはり新しい食材を、一つ簡単に言えば、昆虫食なんていうのがまさにそうだろうと思いますけれども、そういう材料といいますか、そういうものは静岡県は非常にいろんな材料がたくさんそろっていると思います。ですから、新しい食料という考え方だけでなく、いろんなものが生み出されてくるんじゃないかなあと、そういうところを期待しているんですけども、これはやはり、幅の広い知識を持った方々が、あるいは相談しながら作りだしていくのがいいんじゃないかなあと思っております。山もあるし海も、それから農地も狭いながらもあつてもあるんですけどね。そういう中で、そういう新しい考え方のものが生まれてくれば非常に素晴らしいことだなと、また、地域にも貢献できるし、中小企業のみなさんにも、そういうことはプラスになるんじゃないかなというふうに思います。

農業は、農業だからと言って、ただ田んぼを耕すという時代は終わったような気がいたします。特に静岡の場合は雪が降らないものですから、夏場は稲を作る、冬場は違う作物を作って農家収入を増やすということが出来る地域ですから、あとは、その労働力なり、農作業をいかに軽減してあげるかということの考えであれば、これはスマート農業がやはり重要になってきますし、それも考え出すにはやっぱり、人間が考えるわけですが、幅広い知識がないとできないわけですね。特に工学部とか情報学部とか、そういう方たちも含めて、一体になってこれは取り組んでもらわないとできないんじゃないかと、そんな感じがいたします。

従って、この新聞にもありますとおり、新しいことを自らの手で実現することができる人材を養成すると、素晴らしいなあとというふうに思って期待をしているところです。それが今、感想です。

それから一点ですね、さっきもリカレントの話が出ましたけれども、やはり新しい農業者をつくるために、我々から言うと農協の職員あるいは農業団体がそういう人材をもっともっとアプローチして、育てなきゃいかんという立場にあるんですけども、なかなか若い皆さん方は農業に対するその意欲といいますか、非常に少ないんですね。それでやはり、新しい形態の農業といいますか、例えば温室を1つ作ったら、携帯でもって窓の開け閉めができるとか、温度管理ができるとか、それから、肥料も農薬も全部できるんだよというような、本当に機械化して頭を使った農業が、やはり若い人たちは魅力があるんじゃないかと思

ますので、そんなことが考えられる、やはり組織的な問題もありますけれども、いろんな皆さんからまたアドバイスを頂けたらなというふうに思っております。特に大学には素晴らしいいろんな技術もありますし、先生方もたくさんいらっしゃいますので、そういうご指導もいただきたいなと思っております。

以上です。

(森田委員)

いろいろご期待をいただいて本当にうれしい限りで、それに応えていけなくちゃいけないというふうに思っております。

今、農業の関係でいろいろとお考えをいただいたわけですが、本学の中で、ここ数年前からですね、いわゆる「プロジェクト研究所」というものをつくって、研究教育を活性化しようという取組をさせていただいています。このプロジェクト研究所というのは、ある意味、本学の電研、グリーン研究所みたいな、ちゃんとした建物等があるわけではなくて、いわゆる未来に向けてこういう研究がとかこういう教育が必要だからその思考にあった人たちで一つのチームをつくって、そこでそのことについて複数の教員同士で共同研究を進めて、成果を出して、さらにはいわゆる外部資金を獲得していこうというような取組になっております。

そのプロジェクト研究所の一つに農業の「農」と、知能の「知」、農知創造研究所というものが農学部内につくられました。これは、メンバーは農学部と工学部と情報学部、さらに民間の農業機械等をやられているところの方が入っている、というふうに聞いてございます。そのところでいわゆるスマート農業の研究が進められていますし、今回の補正予算の中で、文科省の中でいわゆるスマート農業を支えていく人材を育てることについて、予算が付きまして。本学は今、申しました、農知創造研究所を中心とした取組を、文科省の方に今回、提案させていただいたというところでございます。具体的に農学部では、昨年度からドローンの実習等を始めさせていただいておりますので、こういう形で農学部の中で閉じてできるものもありますけれども、そうでなくて、やはり、情報学部、工学部等の教員の持っているポテンシャルを農業に活かす、または、逆に課題を、農業の課題を向こうに解決してもらうような、そういうことができるのが静岡大学の強みだというふうに考えてございます。

そういう一つの典型的な、シンボリックな取組として、農学部の今のプロジェクト研究所の取組を支援していきたいというふうに考えてございます。

あと農学の関係で出ましたけれども、いろんな資源がございますけれども、静岡県の中で使われていない資源は何かということ考えた場合に、海のことがあるのではないかと、いうふうに考えております。駿河湾については、いろんな県の試験研究機関もございまして、他大学の研究機関もございまして、駿河湾についての研究はあまり行われておりま

せんし、本学でも取り組んでございません。

従いまして、今後は農学部がスターターになるかと思えますけれども、海の研究もできたら進めたいと、ちょっと野望的な話で申し訳ありませんけれども、言い過ぎだと後で言われるかもしれませんけれども、私としてはやはり、海原に出て、新しい学問分野でありますし、そこでの資源を使った教育というのは、非常に魅力的なものができるんじゃないかというふうに考えてございます。そんなふうに少し、質問とはちょっと外れたかもしれませんが、そんなことを考えてございますので、是非、ご支援いただければと思っております。

(小長谷座長)

はい、ありがとうございます。前向きなご意見いただきました。

それでは、玉上委員お願いします。

(玉上委員)

玉上でございます。よろしくお願いたします。

まずはやはりこういう場をつくられた静岡市、静岡大学に本当に敬意を表するわけですが、要するに、今、大学は地域の中にあるということで、特に地方の大学、東京も地方ですが、その全ての大学は地方という中に属しているわけですが、地域の発展は大学の発展なくしてはあり得ないし、その逆も同じわけであります。その中で、行政、産業界、公立大学の方々が参加されての推進会議を、静岡大学のためにやっていただけるのは本当にすばらしい話だと思って、うらやましい限りでございます。

昨年も議論に参加させていただいて、非常に地元の熱心な取組には敬意を表するわけですが、ただ一方で、大学はとても厳しい環境があるということも、これ、否めないわけでございます。特に子どもの数が減っているということ、これは別に静岡市だけの問題ではございませんけれども、ただ、静岡の問題としては、他県に流出する割合が割と多いという課題もございますので、そういったような様々な子どもの数を巡る事情なども考えなくてはならない。

そういう面で今回、こういう形で新学部を目指す未来像をつくるなど、様々な取組をされておられることは、大変結構なわけですが、問題は、まず学部というのは大学が作りたいたい、ではそうですか、というものではまずないということです。つまり、当然これは昨年から議論を踏まえて検討されていることですから、まずはそれは理屈として立っているのだけれども、よく言われるのはニーズ、つまり、なんでその学部がいるんですかということ。それから、シーズ、つまり、大学の中にそういうシーズがあるんですかと。つまり、教えられる人がいて、その入口・出口の問題からすると、果たしてその学部に志願してくださる受験生というか高校生がいらっしやるか、またはその高校生が大学に入る、入って勉強し

て、出た時に、就職というか、採ってくださる会社なり企業体があるか。入口・出口の問題というのが、まずは大きなハードルなのです。

ですから、そのあたりで、まさにこういう場で議論することが絶対的に大事だということですね。地域がこういうことを要望しているんだと、地域がこういうふうな高校生がたくさんいるんだけど、どうしても県内にそういう学部がないから、出て行っちゃおうと。だったら、県内にそれ作ろうじゃないかと。これ非常に自然で、ありがたくて、かつ、非常に意味のある取組だというふうに思いますね。問題はただ学部というのはファカルティですから、教えられる方が本当にいらっしゃるのかどうか、という問題が次に出てきます。

それとそのまだ抽象的な名前ですし、新しいことを自らの手で実現できる人材をつくる、これはもちろん言うまでもなく結構なことですが、学部っていうのはみなさんご案内のとおり、工学部とか、医学部とか、薬学部とか、なんらかの学問を表す名前、つまりそれは教員の集団でもあるわけですね。ですからその時にどういう名前を出すかというのは、その学部を見ただけでどういう先生がいらっしゃるのか、何を学んでいるのか、どういう研究施設、どういう実習施設、どういう施設・設備があるのかというようなことがある程度わかるものでないと、外から見た時に受験生は、これはいったい何をするとところなんだろうと思ってしまうのです。ですからそのあたりのことが明らかになるということによって、名前はまだ出ていませんけれども、名前というのは本当に考えに、考えに、考えたあげくのもので、かつ魅力的で、ああいう学部なら行ってみようかなというようなものでないと、という課題がでてくると思います。

ですから、まさにこの場でまさに地域の方のいろんな声または要望、またはこれから実際受験生、高校生、中学生、小学生からでもいいですけども、そういうアンケートをとるなり、意見を聞くなりして、魅力的な学部をまずは作るんだけど、問題はその静岡大学にそれだけのものがあるか、その時には国からの支援であるとか、いわゆるステークホルダーといわれている卒業生ですとか、地域ですとか、または公共体ですとか、もちろん企業ですね、それから地元の方々、そうしたステークホルダーの方々の支援がなくてはできませんので、まさにこういう場でそういう議論ができるのはいいなというふうに思いました。

例えば、わかりやすい例で言いますと、福島大学に何年か前に農学部ができたんですね。例の「3. 11」で風評被害がとっても大変だったわけです。信じられないことに福島大学に農学部がなかったんですね、大農業国であるにもかかわらず。そこで農学部、そのちょっと前に工学部もつくりましたけれども、農学部をつくって、食の安全というものに非常に熱心な取組がされようとしています。まさにこれこそが地域が求める学部であり、大学が、たまたまそれはシーズがほとんどなかったんですけども、他からでもシーズを集めてでもつくりたいという強い熱意のもとにつくられたと。これは国を挙げても応援するだろうし、地域を挙げても応援してくださるでしょうから、まさにそういうものができるといいなというふうに思ったしだいです。

そういう面では6学部もありますし、静岡県というのは国公立でいえば、おそらくフルスペックな学部がそろっている県なのです。浜松地区、中央地区、県立大学も含めまして、私立大学も含めまして、フルスペックですから、なかなかここにはないものを求めるというのは、なかなか難しいんですけども、最近の学部というのはどちらかというと、そういう学問をあらわすというよりも、矛盾したことを申し上げて恐縮ですけども、学問をあらわすというよりも、いわゆる方法論、いわゆる共創学部であるとか、教養学部であるとか、国際何とかであるとか、グローバル何とかである、そういう名前のものが結構出てきております。そこでまた、一つの新しい作り方をするというのも一つの方法です。いずれにしてもいろんな形で議論が行われるように、この場でまた皆さんのご意見を私も是非勉強させていただきたいと思います。以上でございます。

(小長谷座長)

はい、ありがとうございます。

森田さん。

(森田委員)

ありがとうございます。

私たちが新学部を検討する上で、必要な要点をご指摘いただいたというふうに考えてございます。

当然ながらニーズについては、地域のニーズもありますし、当然ながら私たち高校生のニーズ等も含めて考えていかなければなりません。また産業界等の話も、人材の提供をしたところでのニーズも考えなくちゃいけないということで、限られた数ではございますけれども、少し今、アンケートをして、この新学部の構想、今の考え方について、興味があるのか、またはそういう人材に対してどう考えるかということについて、需要調査等行っているところでございます。まだ調査中です、まだ結果がまとまってございません。まとも次第またご報告したいというふうに考えております。

あと、特にこの新学部構想については、日詰学長が所信表明で表明した通りでございます。本学の1丁目1番地というふうにとらえております。また、その中で学長は、オール静岡大学でこれを取り組むんだと言っておりますので、その意味では、私たち6学部の力、それぞれの分野をもっておりますので、それを集めることで、先ほどの教員、教える人材を確保しつつ、または足りない部分についてはそれぞれ民間の方々も含めて、必要な方々に力添えをお願いしていくつもりでございます。また、そういうところになりましたら、また玉上先生のところですね、お力添えまたはアイデアをいただきたいなと思っております。

私の方からは以上です。ありがとうございます。

(小長谷座長)

ありがとうございます。

それでは今井委員お願いいたします。

(今井委員)

静岡県立大学の副学長をしております今井と申します。

前回の将来構想協議会から委員をやっておりまして、そのことから引き続き、また委員として務めさせていただきたいと思っております。

前の将来構想協議会では浜松医大との関係もありまして、静岡大学がどうなるかということがあったのですが、私たち県立大学としましては、もちろん静岡大学と十分に協力関係を、もちろん浜松医大とも十分に協力関係を持っていきたいと考えております。私、たまたま薬学部出身ですけれども、そういう意味でずっと思っておりました。

それで今日は、最初の説明でどういう考えで新しい学部をつくられるかということを押聴いたしておりましたが、他の委員の方々はあまり言われなかったんですけれども、私一つ申したいことがあります。それは、この目標として挙げられました、新しいことを自ら実現できる人材、社会の仕組みを創造する力を育成する、これ非常に素晴らしいです。こういうことができる大学にどのようにするかというのは、これからの説明だと思っております。その時に私すごく大事なと思うことが一つありまして、倫理なんです。文理融合ということで挙げられています。「理」は理科の理なんですけれども、それは役に立つとか儲かるとか、そういう意味ではないんですね。「理」はことわりですね、物事のことわり、ことわりをしっかりとするということだというふうに私は受け止めているんですけれども、その時に重要なのは倫理だと思うのです。倫理についてどのように学生に教えるかということ、教えるというか、まさにこの社会の仕組みを創造するとか、それから新しいことを自ら実現できるということは倫理なんです。その部分をどのように取り組んでいかれるかというところが、一つの重要な点かと思っております。

特に今、データサイエンスとか、IoTとか、Society 5.0とかそういう話をされましたので、情報倫理という問題が、非常にあると思っております。それは例えば、プライバシーの保護とか、そういうことに関わることなんですけれども、これがなぜ大事だと知られていないかというのは、実はこの部分が、いい面はもちろんあるんですけれども、デジタル化によっていい面もあるんですけれども、実は社会の格差に非常に役立ってしまっているという負の側面があるはずなんです。ただ、どうしてそうなるかというのは、必ずしも解明されていないと思っております。

ですから倫理についての議論をするということが、非常に大事であると思っております。私も大学で倫理の講義をちゃんと整備しようというふうに提案をしましたら、倫理なんか講習会で聞けばいいんじゃないか、そういう反応で、それはちょっと違うんじゃないかと考えます。

つまり、講習会でこうしちやいけないとか教えられるものではない、と。自ら考えて、なぜこれはこうすべきなのか、というのを議論できるような形で持って行く必要があるというふうに私は思っているんですけども、そういう意味でこの、是非、情報倫理、そういうことに注力していただいて、それは非常に全国的にも役に立つことだと思いますし、今後のデジタル化ということに対応するという意味で、心がけていただけると大変ありがたいと思います。

以上でございます。

(小長谷座長)

森田委員。

(森田委員)

ありがとうございます。

非常に、今、先生のおっしゃられたことについては、私は本当に納得しましたし、また、その点については静岡大学の中での議論の中でも出ておりました、特にコースの中で人間科学というところがあります。そういう分野をつくろうと思っているんですけども、そのところの中心になるのが倫理、特に倫理が大事だなと、人を理解する、人の心、人の身体を含めてですけども、人のところに関わってくる。またはさっき申し上げたとおり、情報倫理についてはご指摘の通りだと思っております。本学は、数理データサイエンス、AI教育の全面展開の推進拠点の選定校として位置付けられてこれまでいましたけれども、今回更改があって、改正があって、またそこでも選ばれております。従いまして、本学の一つの教育としての重要なものがデータサイエンス、情報でございます。また情報学部というのも本学持っておりますので、その中でも当然ながら倫理教育、これまでもやってきたわけですけども、さらにその先、今ご指摘いただいたところはその先だと思っておりますので、その辺のところのご指摘は、今後の検討の中で活かしていきたいと思っております。

ありがとうございました。

(今井委員)

もう一つ、言い忘れました。

倫理の問題は実はいわゆる、人文社会学的な意味だけではなく、たとえば理論物理にも関係しているらしいということは言われています。ですから、理論物理、つまり量子力学ですね。量子力学は役には立つらしいんです、私はまったく専門外でわかんないですけども、ただ役には立つけれども、肝心なこと解明できていない。この問題と、この情報倫理がおろそかになっていることによる社会分断の弊害に関して、どうもつながりがあるんじゃないかって、私はうすうす思っているんですけども、まあそれは勝手な思い込みかもしれませ

んけれども。そういう意味でも文理融合というのは非常に重要だと思っています。ちょっと付け加えさせていただきました。

(森田委員)

ありがとうございました。

その点も踏まえて、また、参考にさせていただきます。

(小長谷座長)

馬瀬委員

(馬瀬委員)

静岡商工会議所の専門サービス部会長という立場で、この会議に参加させていただいております。静岡経済研究所の理事長をしております、馬瀬と申します。よろしく願いいたします。

静岡経済研究所というのは、静岡銀行が設立母体になっております、いわゆる調査研究機関でして、来年で60周年を迎えるんですが、私はその理事長として昨年の6月から就任をしまして、それと同時に、商工会議所の専門サービス部会長というのも引き受けをさせていただいております。

商工会議所の専門サービス部会は、会議所の会員の中でいわゆる士業に携わる人が主なメンバーということで、行政書士であるとか、会計士であるとか、というような方々かつ所属をしている部会ということなのですが、部会に関わらず産業界のことを一番よくわかっているだろうということで、商工会議所の方から、メンバーの推薦を受けて、この場に参加させていただいているという次第であります。よろしく願いいたします。

先ほど来、出ておりますように、昨年度取りまとめられた提言の7項目の中で、①の学部の新設に向けた動きというのが見えてきたことというのは、一步前進したものであるということで評価したいと思います。産業界の代表というような立場から、たぶん意見を求められていると思うんですけども、この新しい学部で求められている人材というのは、やはり、地域に密着したということもありますので、静岡県、静岡市というところにイノベーションを巻き起こすような若い優秀な人材を育てていただきたいという思いもありますし、この学部に結集された静岡大学の知的資源をリカレント教育であるとか、最近よく言われているリスキリングといった形で、社会人の学び直しの場合であったり、企業の人材育成の場としても活用できるように、是非、運営に工夫をしていただきたいと思いますと考えております。

私の目から見て、静岡大学さんと地域、特に産業界との連携ということに関して申し上げますと、メーカーとの共同研究がさかんに進められております浜松キャンパスでは相応の成果といたしますか、実績が上がっているように見受けられるその反面、人文系が中心となっ

ている静岡キャンパスにおいては、産業界との交流や連携といった活動が少ないように感じられます。

実際、商工会議所として現在、静岡大学さんと連携して何かやっているという共同事業はないということなんですけれども、私が所属している静岡経済同友会という会がありまして、そこでは人文社会科学部において寄附講座という形で、所属するメンバーが交代で講師を務めまして、静岡県経済の概要であるとか各企業の事業紹介など、学生に対して講義する機会があり、まったく交流がないというわけではないですし、こうした活動というのは学生たちの就職の受け皿となる企業にとりましては、絶好のPRの機会でもありまして、ありがたいところであります。ただ、どちらかというとな産業界からの情報提供と一方通行になっている感が、まだまだ否めない状況にあるというふうに考えております。実際、今、企業経営者の方はデジタル化であるとか、脱炭素化、いわゆる「カーボンニュートラル」といった大きな経営課題に直面しておりますし、このコロナ禍であるとか、大規模自然災害が頻繁に起こっているといった中で、その備えのBCPの策定等々克服すべきような課題が非常に山積しているという状況にありますので、静岡大学さんには地域の中核高等教育機関として、是非、先生方が培われてきた高度な知識を地域の企業にも還元をしていただいて、お互いにWin-Winの関係になって欲しいと願っております。

もう一つはそういった動きの延長戦上として、昨年度の提言の中にもありますけれども、県内の高等教育機関のシナジーを最大限に引き出すための、大学等連携推進法人、こういった制度の活用に向けても、今回示されております、静岡大学未来創成本部、こちらが中心のかつ先導的な役割を果たしていただいて進めていただくということも期待しております。

是非、ここに提言がまとめられていますけれども、こういったものをスケジュール感、スピード感をもって、取り組んでいていただきたいと考えております。

以上でございます。

(小長谷座長)

ありがとうございます。

(森田委員)

ありがとうございます。

経済同友会の方から、講義等で講師を務めていただき、ありがとうございます。学生からも興味があって、評判も高い講義だと伺っておりますけれども、その中で一点、やはり情報が一方通行であるというところは、非常に私たちが反省しなくちゃいけないところがあるかと思っております。

私たちも、それぞれ、地域に対して自分たちの研究成果とかを、打ち出していつてもりであるんですけれども、様々な箇所ですんなり方に、外の方と会うとその点は毎回、指

摘されております。

従いまして、今回、ちょっとしたことですけれども、大学のホームページを本年度末に刷新するというので今、計画しております。いわゆる教員の、どんな先生、こんな研究やっている先生いないのかなあ、というようなことを検索した時に、その先生にあたらないという話で、たどり着けないと、それは会頭の方から、商工会議所の会頭から言われまして、さっそく取り組んだわけですけれども、そういうようなことがないように、やはり私たちの大学の持っている知的な財産を地域の方に利用していただくような、そんな取組が進むようなことを、具体的な作業を進めていきたいというふうに考えております。

また、特に先ほどBCPの作成等についても、前に話しましたが、人文社会科学部等の教員等の持っているものを、できるだけ社会に還元するというのも併せてやっていきたいと思っております。その仕組みづくりというところに今、着手しておりますし、併せてコンテンツ等も十分用意しながら、皆さんのところにお届けできたらなということで、今、検討を進めているところであります。

あと、連携推進法人につきましては、私たちも日詰学長が各大学を4月からご挨拶も兼ねて回らせていただきながら、今、話をしているところです。いきなり、連携推進法人の話というわけではなくて、お互いにコロナ禍で、いわゆる助け合うことができるものがあるかないかということについて、お互いに手を結びつけることができる場所があるんじゃないかということ、一つの話題にさせてもらいながらやらせていただいております。例えば大学院のところ等の教育の各大学が強いところと弱いところがあるのは当然だと思うんですけれども、強いところを持っているところが弱いところにいるようなコンテンツを共有するとか、そういうお互いに手を組むことによって、お互いの、最終的には学生が一番メリットを受けることができるというふうに考えてございます。そのようなことの繰り返しの中で、たぶんこの大学等の連携推進法人という形を最終的にはできてくるかなあと思っております。

静岡県には、ふじのくに地域・大学コンソーシアムがございまして、これは静岡県内の大学が全て加入しているところです。ただ活動内容としては、主にいわゆる学生、各大学の学生に対して、教育、授業科目の提供等が主体になっております。もう少し深い取組、お互いの連携という形にはまだ至っていないというのが現実でございます。その辺のところの既存の組織も活用させてもらいながら、こういう連携推進法人が進むような形も、少し静岡大学がやりたいからといって、他の大学、例えば今井先生のところで一緒にやりましょうと言ってくれるとすぐに進むかもしれませんけれども、そういうふうには簡単にいかないところもあるのも実情でございますので、その辺のところは、私たち丁寧に話をしながら、または協力を仰ぎながら進めていきたいというふうに思っております。

以上です。

(小長谷座長)

はい、ありがとうございました。

それでは最後に、森田委員ですけど、全体を通じて何か、よろしいですか。

(森田委員)

今回はいろいろと紹介できなかつたんですけれども、提言いただいた以降、先ほど言った、中期目標・中期計画を練る中で、いろんな芽が出てきているし、また、大学内の資源等も見直しをかけて、ブラッシュアップできてきているのではないかと考えております。

従いまして、今回、時間もありませんし、いろんなこと紹介できませんでしたが、大学院でもそういう取組をされていますし、また、国際展開のところでもいくつかの取組が始まっていると、また計画がつくられているということでございますので、また、時間をいただいたところでご紹介させていただければと考えております。

よろしく願いいたします。

(小長谷座長)

ありがとうございました。

それでは一通り、今、ご意見、ご質問いただきましたけれども、これはどうしてもというようなご意見、ご質問等があれば、また再度いただきたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか。

はい、大長副市長。

(大長委員)

先ほど聞けばよかったのですが、資料4の2ページでありますけれども、アドバイザーボードということで、検討チームの横に線が伸びていまして、アドバイザーボードに、自治体・産業界等入っていますが、静岡市としますと、この自治体、どのような自治体が入ってくるのかなと思ひまして、今、静岡大学さんの方で、参加する自治体というのはどこら辺を考えておられるのか、照会したいというのが一つ。

それからもう一つがですね、資料3の「将来構想協議会のまとめの対応について」の一番最後の⑦、プラットフォームの創設ってあって、これは私は大変、大きな課題だと考えております。実は昨年、文科省へ伺った時、文科省の方からもこのプラットフォームの組成というのでしょうか、そういうものをしっかりやってほしいというようにお話をいただいたところなんです。このプラットフォームにつきましては、地域の各大学に入ってもらったりとか、産業界の皆さんにも入っていただくということが必要かなと考えておりますけれども、昨年、年度末に協議会のまとめを行ってから1年が経つんもんですから、ここら辺のプラットフォームの組成について早めに検討していかなければいけないかなと、静岡市としては

考えているところですが、それについてはいかがでしょうか。

その2点、よろしく願いいたします。

(森田委員)

ありがとうございます。

未来創成本部のアドバイザリーボードについてのことでありますが、自治体としては静岡県、本学、地方自治体として、ベースとしているのは静岡県ということになるかと思えますし、またその本来の地勢的なところでいうと、静岡市、浜松市が中心となるというふうに考えてございます。そのすべての方に入っていただくというようなことになるのか、その中でどなたかという形になるのか、ちょっとまだこれから検討することになりますけれども、その辺のところを考えているということでございます。

あと、プラットフォームにつきましては、本学でも是非、お願いしたいと思っておりますし、これについては静岡市さんと今後、協議、話し合いをさせていただきながら、意見交換をしながら詰めていきたいというふうに思っていますし、また、そのほか産業界、他にも他大学を含めて、是非、こういう形でということが広がっていけば、またそこに書いてある、先ほどありました連携推進法人等も関係してくるかと思しますので、併せて私たちどもも是非、進めていきたいというふうに考えております。是非、ご協力いただければと思います。

よろしく願いいたします。

(大長委員)

静岡市としても、是非、よろしく願いいたします。

【議事（3）その他】

(小長谷座長)

他にいかがでしょうか。

時間もだいぶ押してきておりますけれども、いかがでしょうか。よろしいですか。

本当に様々なご意見をいただきまして、本当にありがとうございます。

今日は、大長委員の方からは新学部に対する期待ですとか、リカレント教育についてのスケジュール感的なもののご質問がありました。また今、アドバイザリーボードについてもご質問をいただいております。

また、柴田委員からは、特に農学部だけではなくて、情報学部ですとかいろいろな、例えば人文科学系との連携が、これからの人材育成で求められるのではないかと、というような話をいただいたかなというふうに思います。

また、玉上委員からは、ニーズ、シーズというふうなお話の中で、特にそういったことを

踏まえた地域との連携というのが非常に重要になってくる、そういうのを踏まえてこれから対応する必要があるのではないのかなというような話がございました。特に福島大学の例を踏まえてお話をいただいたかな、というふうに思っております。

また、今井委員からは、これから特に重要になる倫理、倫理学、特に情報倫理学ですとかそういった分野、また量子物理学、私はちょっとわかりませんが、そういったところと結びついているのだというような、そういったようなお話があって、非常に参考になるご意見かなと思われました。

また、馬瀬委員からは、産業界との連携、求められる人材ですが、そういった部分、または研究の成果を産業界に還元してほしいと、そういうようなご意見だったのではないかなというふうに思います。

いずれにしましても、限られた時間で、皆様方からご意見いただくということが、十分ではなかったかなと思っております、本日いただきましたご意見も踏まえて、静岡大学の将来構想、議論を深めると、深掘りをするということが非常に大事でないかなというふうに思っております。地域の考えとか要望をしっかりとお伝えしていく場が必要だというふうに考えております。

そこで、この会議の下にワーキンググループを設けて、静岡大学と、地域とが連携して発展的かつ具体的に議論していきたいというふうに考えております。ワーキンググループでの議論の結果につきましては、次の会議で報告することといたします。そして、今後の取組策を大学と地域とが一体となって、推進していきたいというふうに考えております。

なお、ワーキンググループのメンバーや開催方法につきましては、座長の私と事務局とで相談をして決めさせていただきたいということでありますけれども、ご了解いただけますでしょうか。

(異議なし)

(小長谷座長)

はい、ありがとうございます。

もう一点ですね、今回のこの地域の取組については、逐次、文部科学省の方にもご報告させていただきたいです。我々の取組について、非常に注視をいただいていると、関心を持っていただいているということでもあります。この状況につきましても、適宜、文科省の方に報告させていただきたいというふうに思っております。

これにつきましては、会議の設置者であります静岡市副市長の大長委員にお願いをしたいと思っております。大長さん、よろしくお願いたします。

(大長副市長)

はい、わかりました。

【閉会】

(小長谷座長)

本日予定していました議題は以上となります。

委員の皆様におかれましては、円滑な議事進行にご協力いただきまして本当にありがとうございました。

進行を司会の方にお返しいたします。

(司会)

委員の皆様、ありがとうございました。

本日はご多忙のところ、最後までご参加いただきまして、誠にありがとうございました。

以上をもちまして、第1回静岡大学将来構想推進会議を閉会いたします。

ありがとうございました。